

道内の看護職のための専門情報誌

ベストナース Nbest Nurse

2011
10
October

定価 400円

平成23年10月1日発行(毎月1日発行)
平成3年3月20日第三種郵便物認可
第22巻 第10号 通巻260号

慢性期医療における人権と 尊厳を守る看護

実践!退院支援・調整

講演▽京都大学医学部附属病院退院調整看護師 宇都宮宏子氏
各施設の実践紹介
▽市立札幌病院▽苫小牧日翔病院▽札幌西円山病院▽旭山病院

第1回札幌リウマチケアミーティング

特別講演「長崎県における関節リウマチのトータルケア」ほか

疾患と看護 ~ベッドサイドケアの質を高める~

第43回「脳脊髄液減少症(上)」

東札幌脳神経クリニック
高橋明弘院長

ナースリーダー

赴任し、第一に掲げるのは、「看護師たちが長く働き続けられる職場づくりの推進」です。現在、スタッフ総数は足りていますが、入職者のほとんどは同病院の看板科目でもある緩和ケア科を希望の人。スタッフ構成も、20代が少なく、他施設で経験を積んだ30代、40代が多いといえます。

現在、「看護師たちが踏みとどまる理由」についてのアンケート調査を中心とした看護研究に取り組んでいます。「教育、人間関係、上司のフォローなど、いろいろ理由はあると思いますので、研究で明らかにし、今後の職場づくりに生かしていきたいです」。

より良い職場環境づくりに取り組む中、4～9月までの期間で、離職者はまだ一人も出ていません。「本当に有難いと思っています。職員を大事にして、さらにいい病院にしていきたいですね」と、各スタッフに感謝の気持ちを隠しません。目標を持って入職する職員が多いことから、各スタッフのモチベーションも高いといえます。そのため、希望する研修には、できる限り参加させてあげることにも力を入れていく考えです。

また、ホスピスが軸となる同病院ですが、内科、透析などにも力を入れていることから「ホスピスで隠れがちな、そうした部分の良さについて、もっとアピールができれば」と、今後、機会を捉えて

積極的にPRしていく考えです。

このほか、今年は5S（整理、整頓、清潔、清掃、躰）にも力を入れていく方針で、併せて物品の定数管理も始めました。ただ、躰の部分に関わっては、徳州会グループで実施する満足度調査の小規模施設部門で、同看護部が優秀賞に輝くなど、その完成度の高さ

帯広第一病院（帯広市）

山口晴美師長が専任の退院調整看護師に、病棟指導など奮闘中



山口師長

財団法人北海道医療団帯広第一病院（富永剛院長・横尾洋子看護部長、303床）では、今年4月から山口晴美師長が同病院初となる専任の退院調整看護師に就任しました。同病院は、一般病床250床、療養病床50床、ICU3床で運用し、2次救急医療を担う病院として地域医療に貢献しています。退院調整は、山口師長が担当する前は横尾看護部長が1年ほど担当し、それ以前は各病棟スタッフとソーシャルワーカーが行なっていました。

病院内で初めての専任での退院

は折り紙つき。酒井看護部長も、「あいさつや声掛けなど、最初の印象が非常に良かった」と感じたそうです。

こうした看護スタッフたちの意識の高さに裏打ちされた「ホスピスマインド」を根底に、今後、さらなる看護の質向上に向け全力で取り組んでいく考えです。

調整看護師となったことから、「まずは、自分の役割を理解してもらうことが重要」と、時間を見つけては病棟を回ることから始めました。現在では、山口師長の顔と役割が院内でもだいたい浸透し始めてきており、横尾看護部長も、「コミュニケーション上手なので、横の連携も上手くやっています。適任でしたね」と高く評価しています。

2つある急性期病棟を回りながら、カルテやスタッフからさまざまな情報を入手するほか、患者・家族への説明、退院後の社会資源等の確保に向けたソーシャルワーカーや地域のケアマネージャーとの情報交換等々、やらなければならぬことは山ほどあります。患者の病態の程度によって、施設側の受け入れが変わってくることから、地域の施設の情報につい

ても、今後、積極的に収集していきたい考え。また、「介護保険についての知識もまだ十分ではないので、今後さらに知識を深めていきたい」と話すほか、現段階では、在宅への移行部分はまだまだ少ないことから、「在宅を希望する患者さんたちを自宅に帰す取り組みを増やしていきたいですね」と課題も見据えています。

患者の入院初期段階から、退院に向けた看護介入が求められる点についても、「入院してきた患者さん・ご家族に『退院調整をしている山口です』と出向くと、少しびっくりされてしまいます。そのへんのタイミングがまだ難しいですね」。

退院調整看護師として、患者の退院後の生活をイメージしたベッドサイドケアができるよう、病棟スタッフの支援は大事な役目。将来的には「病棟看護師が入院時から積極的に退院支援にかかわり、病棟から情報が発信されるようになるのが理想です」と話し、スタッフ教育の力を入れていきます。また、スタッフ皆で頑張る在宅へ戻した患者たちの自宅での生活の様子を病棟に返すため、訪問看護師を通してフィードバックさせていくことも考えていて、「自宅等での生活が分かれば、スタッフのモチベーションも上がるのではないのでしょうか」と期待しています。

●このページは医療機関等の看護部門の話題を紹介しています。皆様からの情報提供をお待ちしております。